教員がアクティブ・ラーニングを定常的に実践するための条件に関する考察

○橋本　和幸（和歌山県海南市立大野小学校）
○國友　芽意　　（上越教育大学教職大学院）
○西澤　尚輝　　（上越教育大学教職大学院）
西川　純　　（上越教育大学教職大学院）
j275638b@myjuen.jp

要約

本研究の目的は，アクティブ・ラーニングの授業を導入し，継続的に実践するようになった教員の共通点から，教員がアクティブ・ラーニングの授業を定常的に実践していくための条件を明らかにすることである。その結果，教員が定常的にアクティブ・ラーニングの授業を実践するようになるは，まず師範授業を通して，自分の学級の子どもたちの変容を実感することが必要ということが明らかになった。

キーワード：アクティブ・ラーニング　不安感　授業改善　『学び合い』

Ⅰ　問題の所在

昨今，政府の教育改革実行会議第四次提言を受け，高大接続改革や大学入試改革が重要課題となっている。中央教育審議会「論点整理」(2015) は，次期指導要領の改訂の作業を通し，初等中等教育におけるアクティブ・ラーニングの検討を進めている[1)]。中央教育審議会(2012)によると，アクティブ・ラーニングとは，「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり，学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」[2)]と定義づけられており，今後は子どもたちの変化等を踏まえて，教員自らが指導方法を不断に見直し改善していくことが求められている[3)]。

しかし，田村 (2015) は，「学校の授業は，教師自身が子ども時代に体験してきた授業を再現する傾向に陥りやすく，自ら新たな変化に向けて授業を改善していこうとする姿は生まれにくい」とし，授業をする側の意識やイメージの問題を挙げて，知識注入型の授業からアクティブ・ラーニングの授業へ授業改善していく難しさについて言及している[4)]。

一方，アクティブ・ラーニングの授業へと移行した教員も見られる。アクティブ・ラーニングの授業のかたちのひとつとして，西川 (2015) が提唱している『学び合い』があり[5)]，篠崎 (2016) は、「アクティブ・ラーニングの実践理論の一つに『学び合い』がある」と述べている[6)]。『学び合い』実践の研究として，杉山ら (2001) は，子どもたち同士の円滑なコミュニケーション活動が生起することを明らかにし[7)]，市川ら (2007) は，学力の向上が図られることを明らかにしている[8)]。

このように関係性や学力の向上が見られる一方で，継続的に実践していく上での課題に関する研究もあり，篠崎ら (2016) は，『学び合い』を定常的に実践している教員を対象として，課題意識やその解決策のフォーカスグループインタビューを行っている[9)]。

しかし，篠崎らの研究においては『学び合い』を定常的に実践していない教員を対象とはしておらず，また，そのような教員がアクティブ・ラーニングの授業へ移行する際の困難や定常的に実践できるようになった要因については管見の限り明らかとなっていない。

Ⅱ　研究目的

本研究は，アクティブ・ラーニングの授業を導入し継続的に実践するようになった教員の共通点

から，教員がアクティブ・ラーニングの授業を取り入れ定常的に実践していくための条件を明らかにすることを目的としている。

Ⅲ　研究方法

1．調査対象

公立小学校教員（7名）

2．調査期間

2015年9月～2016年11月

3．活動手続き

・アクティブ・ラーニングの出前授業後の協議会で，アクティブ・ラーニングに対する不安感に関する事前アンケートを実施する。
・調査対象の教員が担任する学級で，アクティブ・ラーニングの出前授業を2時間以上行う。
・授業中に児童の見取りを担任教員と共有する。
・授業後にリフレクションを行う。
・担任教員の不安感に応じてサポートを行う。

4．記録方法

・ビデオカメラ2台を教室に配置して授業を記録する。
・ICレコーダーを用いて担任教員との会話を記録する。

5．分析方法

(1)アンケート調査の量的分析

・アクティブ・ラーニングの出前授業を参観した教員に対して，アクティブ・ラーニングを定常的に取り入れる場合の不安感について分析る。

(2)授業記録，会話の質的分析

・授業中の授業者と担任教員の会話の分析
・授業後の授業者と担任教員のリフレクションの会話の分析

Ⅳ　結果と考察

教員が定常的にアクティブ・ラーニングの授業を実践するようになるには，まず師範授業を通して，自分の学級の子どもたちの変容を実感することが必要ということが明らかになった。

※詳細については当日発表する。

Ⅴ　引用・参考文献

1) 中央教育審議会：「教育課程企画特別部会における論点整理について(報告)」，2015.
2) 中央教育審議会：「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」，2012.
3) 前掲書1)
4) 田村学：「授業を磨く」，pp. 55-56，東洋館出版，2015.
5) 西川純：「すぐわかる！できる！アクティブ・ラーニング」，pp. 16-31，学陽書房，発行年2015.
6) 篠崎祐介，黒川麻実，國友芽意，岩村孝治，幸坂健太郎：「主体的・共同的な学びを支援する教師の実践理論への意識-『学び合い』実践者のフォーカスグループインタビューを通して-」，言語文化学会論集，46号，201-222，言語文化学会，2016.
7) 杉山清，西川純：「カウンセリング的手法を用いたコミュニケーション指導，中学校における実践を中心に」，日本教科教育学会誌，22(3)，35-44，日本教科教育学会，2001.
8) 市川寛，久保田善彦，西川純：「小学校算数科における自由な相互作用と学力向上に関する研究，日本共同教育学会誌，3，10-20，日本協同教育学会，2007.
9) 前掲書6)